



モダンな新しい障子の提案

障子紙、画仙紙の一大産地として発展

その後も明治、大正と和紙製造は手漉きで行われてきたが、戦後の経済成長とともに、和紙の世界にも技術革新がおこり、機械化が進められた。最盛期には市川では200軒近く、西嶋も40軒ほどあった手漉和紙生産者は、現在、市川では豊川製紙の豊川秀雄さんのみ、西嶋でも8社だけとなった。

しかし一方で機械化に伴い、それぞれの特長を生かした新たな製品づくりも進められた。丈夫でしなやかな市川和紙は大量生産に向けた障子紙として発

展。抗菌・消臭など高機能障子紙の開発などによりさらに需要を伸ばし、現在、障子紙の全国シェアは40%を誇る。

また平滑で光沢のある西嶋和紙は、全国に先駆けて画仙紙、書道半紙の生産に取り組み、簡易手漉き装置の導入もあり生産量を拡大。全国の書道家らに愛用される画仙紙となっている。



漉き上がったばかりの和紙

山梨から世界へ日本の伝統美を発信

2つの産地はともに新たな取り組みにも積極的だ。ランプシェードや名刺、扇子など、オリジナルの和紙製品の開発に力を入れるとともに、手漉きの卒業証書の作成や書道展の開催など、和紙の



和紙の原料となる楮の樹皮



3月に(財)伝統的工芸品産業振興協会の伝統的工芸品産業功労者褒賞を受賞した豊川秀雄さん

文化を見つめ直してもらったため独自の事業も展開し、和紙の持つ可能性の探求に取り組んでいる。

また、最近では和紙ならではの風合いの美しさや機能性などが見直され、障子をはじめ、さまざまなインテリアへの需要も高まってきており、その魅力は海外でも認められ始めている。

市川和紙の企業4社でつくるグループは、ミラノのデザイン会社と連携し、今年1月、ミラノで開催された世界最大級のギフト・インテリアの総合見本市「マチエフ・ミラノ展」に出展した。出展の目的は、斬新な切り口の商品により市川和紙の魅力を欧州にアピールし、和紙産地のブランド化を図り、産地の振興につなげることにあった。

今や日本だけでなく、世界の人々をも魅了している和紙。これからも山梨から世界へ日本の伝統美を発信していく。



市川、西嶋それぞれの地から生まれた美しい和紙

卒業証書を手し、晴れやかな笑顔で学舎を巣立つていく卒業生。今も昔も変わらない3月の輝かしい光景である。県立宝石美術専門学校や産業技術短期大

手漉き和紙を使用している。また、県立高校においても手漉き和紙の卒業証書は広まりつつある。

そんな中、卒業証書を卒業生一人ひとりが手漉きで作成している小学校がある。和紙の産地、市川三郷町のいくつかの小学校と身延町の小学校だ。6年間過ごした小学校でのさまざまな思い出を胸に、自らの手で漉き上げた和紙。それは世界にたった1枚しかない卒業証書であり、

和紙のまちからの新たな旅立ちへの祝福である。

市川和紙の起源は甲斐源氏の時代にさかのぼる。甲斐源氏の祖・源義清が旧市川大門町に居を構えた際、伴ってきた家臣の紙工・甚左衛門が紙漉き技術を伝授したのが始まりと言われている。

一方、西嶋和紙は武田信玄の任により、望月清兵衛が伊豆国田方郡立野村(現伊豆市)で「修善寺紙」の製法を学んで

持ち帰ったことに由来していると伝えられている。

和紙の原料には「楮」や「三桤」を用い、それぞれ風合いの異なる和紙を漉いているが、ともにその美しさは古くから高い評価を得ている。市川和紙は武田家や徳川家の御用紙として献上され、「美人の肌のように美しい」ということから「肌吉」と呼ばれた。また西嶋和紙も武田信玄に「西末」として認められていた。

日本の豊かな文化が育てた和紙。山梨県においても市川和紙、西嶋和紙の2つの和紙が生まれ、それぞれの文化を育み、障子紙の産地として、また画仙紙の産地として発展してきた。風合いの美しさや機能性など、和紙の魅力があらためて注目されている今、障子紙・書道用紙の出荷額では全国2位を誇る山梨の和紙産業は、次なる時代に向け、新たな一歩を踏み出そうとしている。